



日本洋書協会

JAPAN ASSOCIATION OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

JUNE 2016
REPORT MAGAZINE

会報誌 | vol. 50 no. 4

Published by JAIP 1-1-13-4F, Kanda-Jimbocho, Chiyoda-ku, Tokyo 101-0051

e-mail:office@jaip.jp

理事会報告 2016年6月8日(水)

出席(敬称略)相澤、松村、小松崎、深町、鶴(総務委員長・事務局)

1. 予算状況

事務局から4-5月の予算状況が報告された。予備費の10万は全額熊本地震の義援金に充てられた。他の費目に関しては順調に推移しているとして了承された。

2. 2016年度活動予定

セミナー、見学会等いろいろ意見が出たが、次回までに各理事がテーマを纏めて討議することとした。また総務委員会と文化・厚生委員会との役割分担も必要。

3. 入会予定

・三浦書店：マーク・グレシャム氏の紹介があり、6月7日に理事長と事務局長が訪問し入会を勧めた。新年賀詞交歓会へ招待したこともあり、前向きに検討する旨

の返事があった。

・MHM：9月末に会員資格を満たすので、入会を勧誘する。

4. 委員会報告

・総務：7月に委員会を行い、今後の活動予定を決定する。

・メディア・広報：ダイレクトリーを5月中旬に発行した。余裕のある紙面としたので、若干制作費が上がったが、十分補える広告を募集できた。

・事業：今年のTIBFは9月23日から開催される。7月中に委員会を行い、準備を進める。

・文化・厚生：ボウリング大会は5月24日に開催され、8社、16名の参加があった。ゲーム後の懇親会は若い会員の交流の場となっている。

7月15日のサマーパーティーの案内を今週中に発信する。

5. その他

今回は7月15日に行う。

海外ニュース

ウォーターストーンズのダント氏、アマゾンの税金対策を“良心のかけらもない”と批判

英国最大の書店チェーン、ウォーターストーンズの取締役社長であるジェームズ・ダント氏はあるテレビ番組で、アマゾンには税の抜け道につけこんで“良心のかけらもない”やりかたでウォーターストーンズのビジネスを脅かしている、と述べた。

アマゾンはヨーロッパの拠点をルクセンブルクにおいており、英国本社の子会社より税を納めていない、と氏は言う。

アマゾンは、2015年5月から英国国内での売上を英国支社の売上として計上したが、それは政治家たちから圧力を受けたのと、2015年4月1日に施行された、多国籍企業に課されるいわゆる「グーグル税」の支払いを回避するためだ、とダント氏は言う。

「あのようなビジネスのやりかたは、我々を大いに脅かしている。我々は、地域社会に雇用を提供している。とんでもない僻地に巨大な倉庫を建て、非正規の労働者、パートタイムの労働者

などを雇うのは、雇用の質として同等ではない。すばやく安価な商品を提供するといういい面がある一方で、負の側面も確実にあり、その最たるものが良識のない税金逃れだ」

ダント氏はまた、同番組で紙の本の底力のおかげでウォーターストーンズは堅調な実績を上げていると述べた。

「今、紙の本と電子書籍はいい均衡状態にある。これは一時的なことではない。電子書籍は、本棚に並べて眺めたり、触れて楽しむことができない点で、紙の本とは違うものなのだ」

それでもアマゾンが競争相手であることには変わりがない。しかしダント氏は、アマゾンのように顧客のニーズにすばやく対応することは難しいし、流通や価格設定において既存の書店がオンライン書店に対抗できるとは思っていない、と言っている。

「もし読みたい本がわかっているなら、オンライン書店に行ってください。そのほうが安くて便利だ」

(The Bookseller Online, June 7, 2016)

情報提供：MHM 遠藤尚子

AAS-in-Asia 2016

AAS-in-Asia 2016が去る6月24日～26日同志社大学今出川キャンパスで開催された。AAS-in-Asiaは、アジア研究の組織としては世界最大級であるAssociation for Asian Studies (AAS) が中心となり、アジアの国の若い研究者がアジア研究のカンファレンスに参加しやすいようにと2014年から開始した、アジア研究者の発表の場である。AASの会員に限らず全ての研究者が参加できる。“Asia in Motion”をこの3年間のシリーズテーマとして、2014年はシンガポール大学、2015年は台湾中央研究院、今年は今出川の同志社大学で開催された。来年はソウルで開催予定。

会期中のセッション数は217、参加人数約1,200名。セッションの合間の休憩時間には廊下に研究者があふれていた。同志社大学グローバル地域文化学部の生徒達が会場内のいたるところに待機し、海外からの参加者がストレスなく動けるようサポートに従事していた。彼らだけでなく、本部のスタッフの対応もとても良く、気持ち良く時間をすごすことができた。(日本のおもてなしの心を意識していたように思えた。)

ブースを出展していたのは28社(リスト下に添付)。それぞれがアジア関連、日本関連のコンテンツを展示していた。弊社の自社データベースにもカテゴリーによっては注目が集まった。

過去2年のAAS-in-Asiaのサブテーマはそれぞれ“Heritage and Transformation”、“Ideas, Institutions, and Identity”であった。今年は3年目の区切りとして“Horizons of Hope”をサブテーマに年次

会議を締めくくった。北米で開催される年次会議はもちろんのことだが、アジア研究だからこそアジアで会議開催を定着させ、有意義なアジア研究の発表の場として発展してほしいと願う。

(丸善雄松堂(株) 松野夏生)

ブース出展社

1. Daiichigosei Co., Ltd.
2. Akashi Shoten Co., Ltd.
3. The Japan Times
4. Japan Center for Asian Historical Records, National Archives of Japan
5. Kyoto University Press
6. Japan Publications Trading Co., Ltd.
7. **Gale, Cengage Learning**
8. **Taylor & Francis Group (Routledge)**
9. Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
10. National Taiwan University Press
11. NUS Press Pte Ltd
12. NetAdvance Inc.
13. Kinokuniya Bookstore of America
14. **Maruzen-Yushodo Company, Limited**
15. Bunsei Shoin Booksellers, Co.,Ltd.
16. Wanfang Data Corporation (International) Ltd
17. The Yomiuri Shimbun
18. International Research Center for Japanese Studies
19. The Japan Foundation
20. The Isseido Booksellers
21. Fukuoka Prize
22. Kansai-kan of the National Diet Library
23. Palgrave Macmillan
24. **Springer Japan**
25. Brill
26. **Far Eastern Booksellers**
27. World Scientific Publishing

(太字は協会会員)



我が社・わが街

第4回 早稲田鶴巻町

アセット・ジャパン

山田 仁

今日も朝から印刷機のシャカシャカという音が小気味よく聴こえてくる。事務所のすぐ裏の印刷所からだ。この音を聞いていると心地よい。片や、事務所の前を颯爽とフォークリフトが走り抜けていく。ここではこんな風景がよく見られる。建物の前に積まれた紙の束、〇〇製紙と書かれた木のパレット、折り上がったばかりの文庫本。早稲田鶴巻町界隈で目撃する風景は出版業界の裏舞台そのもの。すでに廃業してしまった印刷所や製本所が多いが——その証拠に建物の一階部分が倉庫だったり、広々とした貸事務所だったりするところは昔、印刷所関連施設だったところだ——事務所のあるこの一角にはまだ印刷所や折本所が残っていて、いまでも世の中に本を送り出している。

私が最初にこの地を訪れたときも——もう二年前になる——こうした風景が暖かく迎え入れてくれた。ここに来る前は、一〇年近く「神田村」で過ごした私にとって、神田はもはや「村」などではなくビジネスの「街」、鶴巻町のこの辺りのほうがずっ

と「村」にふさわしく思えた。「鶴巻村」と呼んでもいいのではないかと思う。近くには出版社もまだ健在だし、印刷関連の工場なら鶴巻町から山吹町にかけていくらかでもある。関口あたりも含めてもいい。長く本に関わる仕事をしてきたので、できることなら本のそばで仕事がしたい。出版業に従事する者の悪い性向かもしれないが、そんな気持ちで事務所をここ鶴巻町に決めた。

現在は倉庫を借り、その一部を事務所スペースとして営業をしている。着飾ってなくて気楽なオフィスだ。遊びに来る人たちは皆この雰囲気を入り込んでくれ、事務所で飲むこともしばしば。どういうわけか議論が弾む。店で飲むなら、早稲田駅を出てすぐのところの「すぎうら」という割烹料理屋がオススメだ。昼夜問わず旨い魚を食べさせてくれる。名物といえば冬は鍋、夏はやはりハモの湯引きかもしれない。絶品だ。京都本場の味とは争えないが、季節を感じさせてくれ、酒の美味しさを引き立ててくれる。



近所の製本所



「すぎうら」にて筆者

Advocacy ad

私たちを取り巻く経済環境は、
日々変化しています。



世界を取り巻く経済環境は日々変化してきています。中国経済の不振、新興国経済の低迷、原油価格の下落…。国内では個人消費が伸び悩み、十数年に及ぶデフレからの脱却は遠く、先行きは依然として見通すことができません。

世界の出版産業はインターネットの普及やデジタル化の進行により大きく変貌し、例えば出版物の生産の一部はコストの安いインドやフィリピン等にシフトしています。一方、出版された書籍や定期刊行物の流通チャネルの一員である私たちの状況は、十年一日の如くなかなか変化の兆しが見えません。

環境の変化により更なる工夫が求められる中、市場は予算削減や合理化により最早大口取引を望める状況ではありませんし、ライフサイクルの短いデジタル商品に多額の技術投資をすることもできません。

この厳しいビジネス環境を生き抜くためには、これまでの“受託型”から“提案型”のビジネスへ切り替える必要があると言われていています。洋書業界においても、お客様のニーズ（問題）を捉え、ソリューション（解決）を販売する“提案型”にスイッチすることが重要だと思いますが、売りたい商品なしに提案型ビジネスが成り立つことは難しいでしょう。

結局、知恵を絞り、銘々の経営事情に合った工夫を凝らし、努力を積み重ねる他はありません。よく企業を構成する三要素はヒト・モノ・カネであると言われてますが、この三要素を活かすのに必要なものが情報と教育です。海外の仕入れ先と国内の取引先の担当者が若返っていくのを目にすると、わたしたちも彼等の新しい価値観にマッチするように、若いエネルギーと知恵と想像力を活かして変わっていかねばならないと思います。

Takashi Yamakawa